

小布施町訪問記

小布施の文化を愛し、出版の仕事を通じて地方と都会を結ぶお仕事をされている青木さんの紹介で、まちとしょテラソの初代館長 花井裕一郎さんと、行政の責任者としてまた小布施堂の創業家一族として小布施の町並み修景に携わってこられた小布施町長 市村良三さんから、お話しを伺うことができた。

【花井裕一郎さんについて】

福岡県出身、東京在住の TV プロデューサーが、公募により、小布施町の新図書館「まちとしょテラソ」の立ち上げと初代館長役に抜擢され、小布施に移り住む。今までにない交流の場として、また、まちづくりの一環としての図書館のハードとソフトを創出した。これが評価され 2011 年には、まちとしょテラソが Library of the year を受賞している。

初代館長を 3 年間務めてから、図書館の立ち上げと運営にかかわった経験を活かして、まちづくりのコンサルタント業務で全国を飛び回っている。また、まちとしょテラソやアンパンマンミュージアムなどの設計者 古谷誠章氏とも関わりを持っている。

花井さんの小布施での取り組みに関しては下記を参照。

<http://current.ndl.go.jp/ca1813>

<http://sva.or.jp/wp/?dialogue=1>

<http://book.asahi.com/column/challenge/TKY201012080201.html>

<http://nlib.jp/wp-content/uploads/2011/11/kakehashi01.pdf>

【花井裕一郎さんのお話から】

図書館とは機能だ。(建物がなくてもよい。) 本と情報だ。

まち図書テラソの立ち上げに 2 年、運営に 3 年間携わった。利用者は、2 万人から 14 万人に増えた。

賛同者は待っていても来ない。こちらから行く。準備室は何を求めているか? 住民は何を考えているか?

大事なものは収集でなく公開。ワクワク通信を全戸配布。(しかし、いまはもうやっていない。)

世界の図書館はどうなっているか。マイノリティー、しごとの手伝い、人の貸し出し。多様な図書館の役割。

まちじゅう図書館は古谷さんのアイデア。まちには蔵書がある。まちからブックオフに売られるのが嫌だった。A3 3 枚の紙芝居で町民に説明。初めに 10 館~15 館になった。

マップ。サイン計画でフラッグ。スタッフが店の横のつながりをつくった。まちじゅうの館長会議。

→他に、恵庭市 35 軒、石巻 百俵館

まちじゅう図書館として、例えば、寺、郵便局、銀行、駅、飲み屋、カクウチ・・・

千葉 NPO (船橋)、まちじゅうライブラリー (大阪) 会員制

「リブライズ」(+facebook) という貸し出し管理アプリ。バーコード ISBN、図書館ごっこ (個人情報を含んでやり取りしよう) (フリーソフト、オープンデータ、アマゾンのデータなどを参照)

吉野ヶ里の「ガーリー」

図書館は、御用聞き連続。

5 年間で 100 のまちじゅう図書館を目標? どれだけの本を町民から町から吸い上げるか。

いまでは、教委の理解がなくて、図書館予算が年間 4800 万円から 3800 万円に削減された。

館長を続ける条件として、まち全体をアーカイブとして記録。ビデオ画像やパンフレットをみんなとっておけ!

いま、西予、西尾でコンサルのメンバーに入っている。西尾では PFI を使った施設更新によるまちづくりを進

めている。

【市村良三 町長について】

市村良三町長は、榊一市村酒造および小布施堂の社長 市村次夫氏の従兄弟にあたる。次夫氏の父で、当地に残る葛飾北斎の絵を展示する北斎館を創設した市村郁夫元町長が急逝した当時、30代で帰郷し、小布施における「町並み修景事業」を行った六者会議のメンバーの一人でもある。たまたま、まちの中心部にあった古い佇まいを持つエリアの所有者たちが立ち上がり、時間をかけてそこに住みながらその土地を利用しながら町並みを修理する作業を続けて来られたいきさつや、景観を整えていくことと、まちづくりや人づくりとのかかわりについて、示唆に富んだお話を伺うことができた。

【市村良三 町長のお話から】

意識を景観にむけるには・・・

まちの統一感と価値の多様性は、相矛盾するものがある。街並み修景事業は、5千坪のエリアに統一感をもたらした。

小布施に伝統的な建物は無い。(もともと貧乏)

しかし、伝統工法はある。だったら、納屋でも伝統工法は守ろう。

行政1+民間企業2+個人3(たなこ1)=6者協議をする。

コストを下げるため、土地の売買はやめ、賃貸・交換で対応。公私の区別はむなしから、こだわらない。

6者満足が得られるまでは、何もやらない。3年+4年で100回以上会議をした。住みながら、できたら壊してまたつくるを繰り返した。

修景は、今までの都市計画ではなかったやり方。

規模は小さいが、計画中から取材殺到。賞をたくさんもらった。(シンボリックな事業で、日本初が大事。補助金をもらうのは前例があるし、不自由。賞をもらって外から認めてもらうのは唯一の特効薬。)

いとこの市村次夫は、小布施堂の社長。(・・・民間主導のまちづくり)

昭和45~54年、おじが町長のときにまちづくりの方向性を出した。当時は何もなかった、基本は農業(今でも同じ)+文化立町(リンゴは強かった。江戸時代末期に絶頂。米は水が悪いので向かない、付加価値型が必要だった。サロンをつくって江戸・上方から北斎などを呼び寄せるところ。)

それから町長が4人+1人変わったが、軸はぶれていない。(明治期は須坂が生糸で栄えた。小布施の地場産業は栗、砂糖→菓子をマニファクチャー化して、卸へ。蓄積を小売りに。(7軒あった。)

敷地、建物空間、アイデンティティ、工場もバックヤードに→茶寮化、物語化。

[景観の背景]

宝暦から酒蔵、そして栗菓子へ。

町長が昭和54年に死亡。我田引水はしなかった。

いまの北斎館は畑の真ん中だった。商売上は、百貨店販売に頼って店舗展開が遅れていた。企業ビジョンの中に修景があった。

田舎の妙味は渾然一体。その中に折り合いをつける。行政のマスタープランは不要。

急がない。6者が納得すること。そのエリアの要素は残す。組み換えはあり。土地の境界は他者に明確にしない→オープンガーデンにつなげる。

小布施に、面白い人を求めて人が来る。ヨーロッパの客が唸るような街づくりをしたい。

日本の観光は信用していない。インバウンドは期待しない。先の長いソロバンがいる。一人も来ない町で良い。

よそに頼るな。小布施にとって重要なのは農業だ。

[北斎館の目的]

- ① 祭り屋台の絵が立派だが、蔵は粗末なので、收藏したい。
- ② 北斎ブームで、画商が買ってしまふ。個人所有のものをまちの宝、シンボルに。
- ③ (北斎の肉筆画の所蔵は日本一、研究機関にしたい。)
- ④ 運が良ければ客が来る。

[高井鴻山文庫]

おじの欠点はあまりにも合理的。町長出馬の時に図書館を公約。
修景 v.s. 保存 → 保存は嫌いだ。生活が大変になるし、映画じゃない。
行政にとって建築家は女房。君たちは妾を持たせようとするのか??

まち図書テラソのコンペに、宮本さんを審査員。164社のうちの30社はビッグネームだった。

イタリア、フランスは、広場文化。

道路を「道」に戻したいと思った。国道を広げる一方にすると須坂の失敗を招く。(人が歩けない街に)
小布施は、国道をバイパスに付け替え、自動車交通をまちから出す方針。

昭和54年当時、修景のメリットはないが、長野信金も北野建設も引き受けてくれた。若者にやさしかったと思う。

大学とも複数関わった。しかし、大学のインターンシップは何の効果もない。

[民家のメリット]

前は道路で住宅はバック。道路沿いは店舗にして賃貸料をとる。小布施の人が生きていくには景観の大切さを感じる。

前町長の「花のまち」。竹下内閣のふるさと創生で、ヨーロッパに花を見に行つた。

20人×10年=約200人(半分補助)で街が美しくなる。イギリスのオープンガーデンも見た。そのときすでに20軒が修景でオープンしていた、それがいま130軒になった。

北斎館限界が自分にとっての小布施。選挙で歩くと農村部も美しい。昭和45年に都市計画区域の線引きをした。リンゴ、ブドウ、モモ、クリ、ナシ(9割以上が補助)がある。ハウスでなく露地もの。四季は美しい。まちに向かうと景観のグラデーション。農業に力を入れる。

TPPは食糧問題。しかし果樹は食糧ではない、美術工芸品のようなもの。売るまで責任を持つ。客にとっても安心。農業は財産だ。

ぶどう園も客から景観を褒められると信じる。行政ではダメ。→オープンファーム。

花を植える。果実泥棒も1万人規模のまちなら見張れる。

小布施の農村部は高齢化。線引きを緩める? 若い人の価値観の多様化。みんなでルールをつくって、良くなることを納得してもらおう。

NPO、ボランティアのビジネス力(持続性、金)はない。企業の方が持続性がある。

地場になれば、よその優良で志の高い企業(工場誘致よりも、まちづくりを担ってもらえる企業)を招く。

文化的なことはコストと認めない税制。

企業は社会貢献しなければ存続しない。

国・県は信じない。アンチ都市計画、アンチ全総。ゾーンニングが市民を市民で無くしてきた。

[小布施のみちづくり]

市内を通る国道403号を拡幅せずに、ハードな歩車分離はしない。車のためになっても、人のためにはならない。車道が市内を分断してしまう。

車道と歩道をブラウン系の透水性のカラー舗装と4cm位のマウンドでゆるく分けることによって、歩行者の自由度を確保。そうすることによって車の走行速度も下がる。

【小布施のまちづくりのこれまで】

●第1ステージ（1970年代～）

自然景観と文化景観が調和した“小布施の格調”を維持し育てる

「北斎館」建設や町並修景事業に加え、町民や町内企業による住まい・店舗づくりによって個性を持った新しい町並み景観を形成

●第2ステージ（2000年代）

「協働」と「交流」をテーマに4つの協働を基軸とした“まちづくり”

「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」設立や地場企業との協働による「第二町並み修景事業」を推進。町民の知恵や力をまちづくりに生かす仕組み「小布施まちづくり委員会」が発足。

次世代に受け継ぐ“小布施まちづくり”を見つめ直し、未来の担い手を育成する世代交代のとき。

●地域内における、世代を超えた知恵の結集「地域の未来づくり会議」

地域コミュニティの最小単位である「自治会」ごとに、世代を超えて集い、10年・20年先を見据えた率直な議論を進める中から、地域の新しい未来像を描き、具体的な行動につなげていくことを目指す。

●地域を超えた、新しい時代の知恵の結集「小布施若者会議」

全国から若者が集い、これからの地方や日本の未来を議論。今の時代を捉えた若者の視点やアイデアを“小布施まちづくり”に積極的に生かすとともに地域を超えた、新しい協働につなげていく。

これらの知恵を結集して、地域の未来像を描く、具体的なプロジェクトが生まれる、まちづくりを担う人材が育つ。

2012年にスタートした小布施若者会議（町内外の100名以上の若者が3日間にわたり、ホームステイ、図書館、小学校などで、これからの地方や日本の未来を語り、新しい実践に向けてアイデアを出し合う）のきっかけは、7年前に若者からもらったスノーボード施設をつくりたいという提案と、2009年の第61回日米学生会議だった。

【東京理科大学・小布施町まちづくり研究所長（東京理科大学理工学部建築学科教授）川向正人さんのことば（資料より）】

まちづくりは行政のしごとだという住民の意識を変える努力をしてきた。住民一人一人が意識を変えて、建物・土地の現状変更の際に、少しでも景観・まちづくりに資するように心がけるだけで、まちの魅力が増し輝いてくる。公共事業も、道路でも公共施設でも、直接の必要を満たすだけでなく、住民の力を引き出し、地域全体の魅力と輝きを増す仕組みを持たねばならない。

小布施町の町組と呼ばれる中心部は、家並みを破壊して広告看板を氾濫させる近代化・都市化の波に抗して「町並み修景事業」（1982～1987年）を進めて、歴史文化の豊かな住・商業空間を蘇らせた。景観条例も自主制定した。

修景は、曳家をして場所を移動させることもあるが、古い家屋をできるだけそのまま残し、内部を改装して活用するもの。新築する場合も、昔から存在する家屋との調和を重視する。古木・石組・水路なども残す。これは見た目だけのレトロ趣味ではなく、お金をかけず、住んでいる人々が主体となって、歴史文化の豊かさを実感できるまちづくりを実現するための、合理的でスマートな手法だ。

現在日本中で行われている道路拡幅事業は、スクラップ・アンド・ビルドにより見た目の違いを生ずるのみで、どこでも使われる画一的な形態・材料・技術で仕上げ、沿道家屋の建て替えが進めば、膨大な事業費をかけながら、修景事業が水泡に帰してしまう。